

満州開拓少年隊

山形県 佐藤 喜太郎

昭和十二年四月、役場の掲示板に「満州開拓少年隊募集」がはり出されていた。私は思いきって役場に行き応募した。父は反対でした。それでも堅い決心を聴いた父はしかたなしに許した。青年学校の二年生で十六歳である同村の東海林利雄君と二人で山形県会議事堂の一室で選考を受けて即日合格し次の日の山形新聞に発表になったので村の人々は突然のことで驚いていた。

七月二十二日、父や弟妹達と村の人々に付き添われて県の招魂社で壮行式があり教育会館でみんなと一緒に会食をいただき、その日の夜行で一行十四人は県職員に引率され、茨城県友部の内原農場に着いた。

ここで一か月間の訓練を終えて、私共哈達河の少年隊十四人と長野の伊拉哈の少年隊百人と一緒に渡満の

途についた。

昭和十二年八月二十五日伊勢神宮を参拝して敦賀から「さえびりや丸」に乗船、朝鮮の清津に上陸したところ貝沼団長さんが迎えに来てくれた。

ここから汽車で南陽・会寧・図們・東京城・寧安を通る頃は広い大平原の果てに夕陽が赤々と傾いているのを見てああこれが話に聞いていた赤い夕日の満州かと思った。

牡丹江に一泊、翌三十日に牡丹江出發、んにくの香りただよう汽車の中だったのが今も忘れられない。林口で乗り換えて夕方東海駅に着いた。団員の方々の出迎えに感謝しながら一緒に歩いて目的地の第四次哈達河開拓団の少年隊の隊舎に入った。

隊舎とは満人家屋の一棟が私共の宿舍である。内地の電灯の生活から、石油ランプの生活になり、外に出ると真暗で恐ろしいくらいだった。

少年隊の指導は貝沼団長の指示で熊本区の上野勝氏福島区の鎌倉大三郎氏があたって下さった。貝沼団長さんは私達一人／＼に。

二宮尊徳先生の「報徳要典」を下さった。

私達は実習や訓練に、集団伐採、醸造場で、味噌、醤油、漬物つくりと何処へ行くにも「報徳要典」は離さず勉強したものである。今となれば団長さんが私達にのこしてくれた尊い遺訓となりました。

あと先になるが、某日、貝沼団長さんは私達を城子河開拓団訪問につれて行って下さいましたが城子河の団長さんは佐藤修先生です。

城子河の少年隊の歓迎をうけて一緒に食事し弥栄神社に参拝、皆で記念写真を撮ったり社前で武道の試合など忘れられない思い出がある。十七年頃になると家族招致して個人の農耕経営となった。十八年には兵隊にゆく人が多くなり部落の男性が少なくなってきた。

私は十八年に日本に帰り結婚して妻を伴って渡清した。二十年五月、私にも召集がきた。

牡丹江省八面通の満州第五軍第百十六師団工兵隊に入隊した。八月、日ソ交戦となり私達の部隊は掖河愛河に前進を命ぜられた。

もう私達が牡丹江に戦闘のために出向いた時は既に

奥地から続々として避難する人々で一杯だった。団ではみんなどうしているだろうとそればかり心配しながら行動した。後日、聴くところによれば、この時分だろう、貝沼団長さん以下みな非常に苦しい避難を続けていたのである。八月十二日。貝沼団長さん初め多数の団員、家族の人達が麻山に於て集団自決をしてしまったのである。言語に絶する悲痛さわまりないできごとである。

征く良人に新しき下着等装いし妻は開拓の広野に自決して還らず。

私達の部隊は愛河で戦闘になった敵の攻撃を受けて壕は使えなくなつたので小川の岸辺の柳の根株を弾よけにしてじっと身動き一つできない砲弾の来襲であった。鉄の火の雨とはこのことであろうかと思つた。夕方になって攻撃は止み暗くなつて撤退が伝えられて来た。

二日後、横道河子の山中に陣地を作つたがここで終戦命令がでた、昭和二十年八月十八日であった。武装解除して海林の収容所に入った。そして九月の上旬頃

ソ連に送られた。朝夕は寒い、沿海州の朝は霜が降りていた。空腹と野宿の寒さは忘れる事が出来ない。幸い抑留生活を終わり昭和二十三年十月一日、帰還船英彦丸で舞鶴に復員した。神の守りか佛の守りか無事で帰って来たのだが実家に帰ってみるとこの間渡満したばかりの妻は白木の箱となつて先に帰つて待つていた。

こんな馬鹿なことがあるものかと思つたがこれは事実であつた。胸に刃を突き刺されたようだった。体の力が抜けてなくなつてゆくようであつた。自分は落ちて着いて思つた。自分は生きなくてはならないそれには働かなくてはならない。唯夢中で働いて耐え難きを耐え忍んでの生活である。ああよく耐えたと思つた。健康な体に恵まれたお蔭でと感謝している。

現在は妻と長男夫婦と男の子の孫一人と長女と皆元気で働いている。これもみな現在の平和のお蔭であると感謝している。

赤い夕陽の太陽は暗かった

福島県 鈴木久次

私は小学校五年生頃から、満州大陸にあこがれを持つていた。新聞や写真で見る広大な大地、赤い夕陽、牧歌的田園風景などに幼い胸をときめかしていた。いつかは満州に渡り、就職し、大きく飛躍しようとの夢を持ちつづけていた。

昭和十四年九月、満州国職員試験をうけ合格。十月九日、吉林丸で大連に到着した。夢にまでみた満州大陸に降り、「やつと俺の夢が実現した」と、大きな希望と期待に胸をふくらませ、旅順港や二〇三高地の日露戦争の戦跡をまわり、「満州国の開発伸展に最大の努力を尽くそう」と決意をした。新京に行き、一週間研修を受け、奉天省開原県公署に配属された。満鉄沿線の人口三千人ぐらいの小さな街で、農産物の集散で活気にあふれていた。